NEWSLETTER

James Joyce Society of Japan, April 2018

Topics

1. 第30回研究大会　個人研究発表要旨、シンポジウム要旨
2. 大会日程と会場・懇親会会場
3. 特別講演会のお知らせ
4. 会費の振込について

フィニックス・パークのマガジン要塞付近　南谷奉良／撮影

事務局連絡先

日本ジェイムズ・ジョイス協会
事務局　〒422－8009
静岡市駿河区弥生町6–1
常葉大学　外国語学部英米語学科
戸田勉研究室内
（キャンパス移転のため住所が変りました）

Mail：joyceanjapan(at)gmail.com
［(at)を＠に］
協会ホームページURL：
https://www.joyce-society-japan.com

第30回研究大会のご案内

2018年6月9日（土）、第30回日本ジェイムズ・ジョイス協会研究大会が開催されます。会場は、法政大学市ヶ谷キャンパスです。なお、懇親会会場に早めに出席人数を連絡する必要があるため、大変お手数ですが、同封した出欠確認のハガキを5月27日までに投函して下さいますようお願い申し上げます。

日程：2018年6月9日（土）

会場：法政大学　市ヶ谷キャンパス
富士見ゲートG 403 教室

懇親会場：アルカディア市ヶ谷（私学会館）

1．第30回研究大会　研究発表要旨

『ユリシーズ』のジャポニスム―「解体」と「再生」の発想

東郷登志子

『ユリシーズ』には、『ダブリン市民』や『肖像』にはないウィットやユーモアが散りばめられている。一体、なぜ、そのような要素を採り入れたのだろうか。

本発表ではその理由として、日常的な素材を奇抜な構成と透視図法で空間描写するジャポニスムの絵画に象徴される「解体」と「再生」の美学的発想を比喩的手法で文学化する上で影響を及ぼしたと推測される日本人との関連を考察する。その日本人についてはジョイス自身が「Oを継承するため」という言葉を残していることや、その日本人の期待に応えたと考えられるジョイス自身の朗読による鐘の擬声音と同文脈における暗示的表現、及び弟宛ての1907年1月10日付け（十二夜の後）の書簡を根拠とする。ジョイスが遺したこれらの象徴的暗示を手掛かりに、これまで批評の俎上に上ることのなかったその日本人と、ジョイスとの関連を『ユリシーズ』におけるジャポニスム的要素から考察する。

方法は、ジョイスの暗示性と秘密性を考慮し、当時ヨーロッパを席巻していた黄禍思想、文芸思潮、歴史的背景、及びジョイスを取り巻く人々の傾向から俯瞰し、『ユリシーズ』とその日本人の著書との類似を呈示する。そして、1904年当時の日英関係と、日本に対する両面価値的な国際的危惧の念を接点として、「死」から「生」へ、「苦悩」から「微笑」へ、さらに特殊テーマを普遍的表象へ止揚する上でジョイスの言語芸術を転換させる契機となりえたであろう大胆な発想と造形原理をその日本人から踏襲している事実を指摘する。そして「マッキントッシュ」という普通名詞に仕掛けられた多義性からジャポニスムの換喩を引き出し、意識の流れの手法でジョイスに影響を与えた小説家や画家達の傾向と回想などから「語らずして語られている」その不存在の日本人を背骨に貫通させている『ユリシーズ』との不可分な関係を明らかしたい。

＊＊＊

Wandering Dogs—ジョイスと犬の都市

南谷 奉良

ジョイスの小説作品に書きこまれた犬という動物に対して読者はどれほど意識的だろうか。驚くべきことに、この作家の描くフィクションの空間には、運河沿いの土手で溺死体の匂いを嗅ぐテリア犬、フェアビューの浜辺で鳴き声をあげる犬、マリーン・ステーション・ホテルの敷地内にいるフォックステリア犬、夜の暗やみのなかに想像される大きな目の黒い犬、サンディマウントの浜辺に横たわる犬の死体とその匂いを嗅ぐ雑種犬、ファンバリー路地を糞で泥濘ませる野良犬たち、レイモンド・テラスの路地で交尾する二匹の犬、グランド運河湾口付近にある野良犬の収容施設、ブルームの父が愛した老犬アトス、ロイヤル運河に捨てられた犬の死骸、リオルダン婦人が飼っていたスカイテリア犬、デューク路地のスカベンジャー犬、バーニー・キアナンで唸りをあげる猛犬ギャリーオーウェン、夜の街を徘徊する「キルケ犬」、ダンサー・モーゼスの膝上のプードル犬、ブルームが連れ帰った片足が不自由な犬、貧困者を追い立てる無鑑札犬たち、ベル路地で吠える犬……等々、数多くの犬がうろつきまわっている。本発表でははじめに、『トムのダブリン市住所人名録』に記載されたダブリン市内地図にこれらの犬をマッピングしてその

地理的分布を俯瞰し、その街の「復元」に犬という動物が必要不可欠であることを指摘する。ついで1796年の犬税法から1865年のアイルランド犬規制法、1885年のダブリン市におけるドッグズ・ホームの設立、1890年代の口輪令、1903年のアイルランドにおける狂犬病の根絶宣言まで、およそ一世紀にわたる犬対策を概観しながら、歴史上の楔に1904年のダブリンの街をさまよう犬々を紐付けていく。幼少期に噛まれて以来、重度の犬恐怖症を抱えつづけることになったジョイスがなぜここまで多くの犬を書きこんだのか。伝記的な説明のみによらない、近代の犬そのものへの恐怖心を浮かび上がらせてみたい。

シンポジウムⅠ：要旨　*Ulysses*第 17 挿話再読

パネリスト　小田井　勝彦(兼司会)　猪野　恵也 / 豊田　淳/ 鈴木　英之

東京で行なっている研究会「ユリシーズ精読の会」では、10年以上の歳月をかけ、第17挿話の読書会を行なった。それほどの長い年月がかかったのには理由がある。第17挿話は、すべてが抽象的に描かれ、感情が欠落し、必要ではないことが書かれる一方必要なことが書かれないというあてにならない語り手による教義問答の形式による挿話である。そのような特徴を持つ挿話をいかに文学作品として読むことが可能なのだろうかと、抽象的な描写を具体的に再現し、欠落した感情を補い、必要ではないことが書かれた理由もしくは必要なことが書かれない理由は何かをひとつひとつ検証してきたことが遅滞の理由である。そしてそのような作業をした結果、第17挿話は中立性を装った語りが醸し出す、実にアイロニーに満ち溢れ、笑って読むことができる挿話であると気づき、ジョイスが「最もお気に入り」と述べた理由に一同納得したのである。このシンポジウムはそのような精読の成果を披露するものである。

第17挿話を論じる際、教義問答という語りの形式についての議論は避けて通ることができない。そこでまずこの挿話のナラトロジーに関する先行研究をまとめた上で、この挿話の特徴的な場面を取り上げ、教義問答形式の無味乾燥な文章に登場人物たちの実際の声、心情、動きを加えた解釈を施すことで、もう一度文学作品としてこの挿話の新たな読みの可能性を探っていきたい。

第17挿話はなぜ教理問答なのか

猪野　恵也

やや古い本だがC.H.Peakeの*James Joyce: The Citizen and the Artist* (1977)の区分けにあるように、スティーヴンとブルームの出会いの結果はどうなるのか、モリーの不義の結果やブルームとモリーの今後の関係など『ユリシーズ』をこれまで粘り強く読み進めてきた読者は物語の結末を素朴に期待して本挿話を読むと思われる。しかし、読者の期待を裏切るかのようにその答えは、例えばヴィクトリア朝小説のように明確な形で明示されてはいない。ジョイスはなぜ教理問答という形式を採用したのか。内外問わず、すでにレベルの高いナラトロジーに関する先行研究が存在するが、それらを参考に検討したいと思う。

Little Harry Hughes 再考

豊田　淳

『ユリシーズ』の中には数多くの音楽の引用があるが、楽譜付きで引用されているのはこの“Little Harry Hughes”の歌だけである(第九挿話にネウマ譜があるが)。楽譜はジョイスの友人ブノワ・メシャンが書き、歌詞はジョイス自身が書いたらしい。これは読者にただ黙読するのではなく、声に出して歌ってほしいという事だろう。だが、なぜこの歌だけ歌ってほしいのだろうか。これが第一の疑問である。

次になぜスティーブンは反ユダヤ主義的な人殺しを扱った残酷な内容の歌をブルームに歌ったのか。この事についてはこれまでも多くの人がさまざまなことを言っている。先行研究を踏まえながら、歌詞の内容、前後の教義問答を再考し、新しい視点を提出したい。

ブルームが思い描く理想の家庭生活

小田井　勝彦

教義問答のひとつで、ブルームを頻繁に悩ませている家庭問題について問われ、「妻というものをどのように扱うべきか」という解答がなされる。そしてそれに続く7つの教義問答において、モリーの「精神的発達不足」の実例が述べられ、その仮定の解決策や実際にブルームが行なった教化策が述べられている。また、スティーブンとの間に交わされる提案の中には、「知的対話」も含まれている。ブルームがこのようにモリーの教養を高めようとする背景には何があり、そしてこの挿話の後半で描かれるブルームにとっての理想郷 “Flowerville”での生活は如何なるものか。これらを考察することで、ブルームとモリーの破たんした夫婦関係について改めて考察したい。

科学と人間と笑いと

鈴木　英之

『ユリシーズ』第17挿話に対する長年に亘る精読の試みを通して、我々が対峙したその難解さと、多少の新たな発見について語らせて頂けたら幸いと考えています。この挿話の不可解さの本質が、文体と被写体の距離感にあるということは言うまでもないが、そこに笑いが意識される場合も多い。脳科学・精神医学分野の「笑い」の分析に関する論文もいまだ不確定的要素の多い現在では、本発表も、科学的文体によって処理されようとする人間ブルームの心理と、一読者の個人的な笑いについての発表にとどまることとなるが、同時にジョイスが本挿話を“Ugly Duckling”と呼んでいた真意をその周辺に探りたい。

シンポジウム II 要旨:　101年目の*EXILES*

司会：吉川　信　　パネリスト：田多良　俊樹　／岩下　いずみ　／近藤　耕人

*Exiles*は、1918年5月、グラント・リチャーズによって出版された。ウォルトン・リッツの考証によれば、執筆の開始は1913年11月、タイプに起こされたのは1915年7月である。その後イングランドやヨーロッパ各地、さらにアメリカにも及んだ上演交渉はついに実らず、1917年7月には、手書きの清書原稿がニューヨークのジョン・クインに買い取られている。清書原稿の表紙にはチューリッヒの住所（1917年1月から10月まで居住）が、最初のページにはトリエステの住所（1912年9月から1915年6月まで居住）が書き込まれている。

本 シンポジウムでは、トリエステからの一時帰国を舞台に据えたジョイス唯一の戯曲を、おもにつぎの三点から考察できればと考えている。

・オスロ／ダブリン／トリエステという都市との関わり（その政治的状況）
・『若き日の芸術家の肖像』と執筆期間が重なっている点（『ユリシーズ』との関連）
・戯曲という形式（イプセン演劇、ベケット演劇との関連。ジョイスの映画への関心）

パネリストには、中国四国九州ジョイス研究会で中心的な役割を担っているお二人の会員に加えて、ベケット研究者であり*Exiles*の翻訳者でもある近藤耕人氏をゲストとしてお招きする。

（吉川　信）

ノルウェー、あるいは北欧のアイルランド？
—— *Exiles* を政治的寓意劇として読むための再文脈化 ——
田多良俊樹

背徳と忠誠との間でじれったいほどに揺れ動く夫婦の愛憎を描く三幕劇たる *Exiles* に、政治的な寓意を読み込むことは可能だろうか。

たとえば、Andrew Gibson は、*Exiles*が「1912年の夏」に設定されている点を重視し、同年の第３次アイルランド自治法案上程後の政治的文脈において、この劇を読み直している。同年アイルランドに一時帰国していたJoyceは、自治権獲得が現実味を増していくなかで、アイルランド・ナショナリストが、敵対するアルスター・ユニオニストさえも「１つの国家」理論（“one nation” theory）のもとに抱き込んでいく様子を理解していた。しかし、Joyceは、Richard と Robert の関係性に、ユニオニストとナショナリストとの間にある民族的、宗教的、政治的対立を反映させ、最終的に和解しえない両者を描くことで、楽観的に過ぎる「１つの国家」理論を批判したというのである。

Gibsonの解釈は、*Exiles*がトリエステで執筆されたという事実によって是認されるだろう。John McCourt が指摘するとおり、当時のトリエステは、オーストリア＝ハンガリー二重帝国の支配下にあり、イタリア回帰を目指すイレデンティスト運動が文化と政治の両面で隆盛していた。つまり、ダブリンと酷似した政治状況下のトリエステで執筆したからこそ、Joyceは自治をめぐるアイルランドの動向を *Exiles* に書き込むことができたのだ。

ここで想起すべきは、Ibsenの祖国ノルウェーも、アイルランドと同様の状況にあったという点である。1841年の合同法によりスウェーデンと同君連合を形成したノルウェーでも、独立を志向する言語運動や演劇運動が展開していた。そして、Ibsenもそのような演劇運動に参画していたのである。このようなノルウェーの政治状況をJoyce自身も把握していた可能性は、わずかにではあるが、彼の書評 “Catilina” に示唆されている。

かかる観点から、本報告では、ノルウェーの政治状況がIbsen演劇を経由する形で、*Exiles*に影響を与えていないか検討する。そうすることで *Exiles*を再文脈化し、Gibsonが提示した政治的読解の拡大を試みる。

トリエステのジョイス：*Exiles*に見る映画館事業とP. B. シェリー
岩下　いずみ

ジョイスは1904~1915年の間トリエステに在住し*Exiles* (1918) には当時のジョイス自身を含む人物像、人間関係、出来事が大きく投影されている。ジョイスはトリエステ在住中数回ダブリンに戻っているが、その理由の一つであったダブリンでの映画館事業を第一の着眼点として、*Exiles*を読み解きたい。それを起点として、ジョイスにとって映画および映画館事業とその失敗が*Exiles*執筆にどのような影響を与えたのかを考察する。

映画及び映画館事業においては、ヴォルタ座第一回上映作品 *Beatrice Cenci* (1909) と*Exiles*のベアトリスの繋がりを契機とし、ベアトリーチェ・チェンチのテーマから、*Exiles*におけるジョイスとP. B. シェリーの関連を探る。ベアトリーチェ・チェンチは文学、芸術の分野で頻繁に取り上げられてきたが、シェリーはベアトリーチェを扱った悲劇*The Cenci* (1819) をイタリアで執筆している。*Exiles*のベアトリスと*The Cenci*のベアトリーチェの関連性を確認しつつ、ジョイスがベアトリーチェという古典的テーマを、ベアトリスを通して*Exiles*に取り入れていたのではないか、という問いを通して、芸術における古典テーマの反復について触れたい。

*Exiles*作者ノート中のシェリーへの言及にもジョイスとシェリーの関連が見られるが、母国を離れて執筆活動を行ったなどの両者の共通点も加えて確認する。ジョイスは映画館事業を通してベアトリーチェ・チェンチというテーマに触れ、同テーマを扱っていたシェリーにも思いを至らせていたのかもしれない。映画館事業とシェリーというキーワードからの*Exiles*考察から、ジョイスのエグザイル観にトリエステ在住が与えた影響が見えてくるのではないだろうか。

作家にエグザイルするジョイスのプレイ
近藤耕人

戯曲『エグザイルズ』は２組の男女がX字型に交叉して、そこから抜け出すことができず、エグザイルとして『ユリシ−ズ』の旅に船出しようとする作家ジョイスの創作の過程を、二つの部屋の二日間に凝縮して舞台化した緻密な台詞劇である。

夫婦と、従兄・従妹同士の関係の男女。男同士は双子の兄弟ともいえる親密な間柄。この入り組んだ男女をめぐる自由と尊厳の模索は、『若い芸術家の肖像』での自伝的主人公の、一人称的な自由と尊厳の追求から、二人称と三人称を内包する作家=主人公への脱皮（エグザイル）と成長の探求の過程と見ることができる。夫婦は「私」と他者の合体と反発の共同体であり、さらに男同士の分身的他者は、「私」の精神（モラル）と身体（情欲）の葛藤と競合であると同時に

「私」の他者化であり、それは自伝的「私」から小説の客観的主人公へ普遍化でもある。それは『ユリシーズ』で自伝的一人称スティーヴンから主人公ブルームの非人称（エグザイル）へと発展し、ジョイスの自伝的作者から普遍的非英雄的ブルーム、ホメーロスの神話の英雄オデュッセウス（エグザイル）のパロディの創造を目指している。それはさらに『フィネガンズ・ウェイク』で人称は水の流れの音と言の葉に溶けて世界をめぐる。

2006年のロンドン、ナショナル・シアターの再演は、「ガーディアン」の劇評では、一人の女をめぐるのぞき行為による二人の男の同性愛的結びつきと愉楽の面に注目し、オスカー・ワイルドの「結婚は三人あっての仲、二人ではだめ」の言葉を引用していた。たしかに芝居にはのぞき視るというエンターテインメントの要素があるが、この芝居では肝心の覗き視る寝室は幕の向こうで、舞台ではそのまねごとを見せるだけで、じっさいの濡れ場は観客の目からは隠されていて、言葉だけで推理させられるので、そこは小説的であると言える。ブルームもモリーの自宅での情事は読者と一緒に想像するだけで、ベッドではモリーとは背中合わせに逆向きに寝る。

ジョイスとノーラのダブリンでのデート、トリエステでの夫婦生活とその間のユダヤ人との交流などの経験を下敷きにしたこの劇は、一人称から三人称、さらに非人称の反ヒーローへの創作の発展の一段階の台詞劇のプレイと私は観る。

ベケットは『並には勝る女たちの夢』などの作品から、ジョイスと同じように作家の道への出発をするが、『マーフィー』で統合失調症患者エンドンの目のなかに、自分が不在であることを確認するという、主体喪失の衝撃を受け、自己の不在と非人称化、普遍化へと進み、ジョイスの水の言語とは異なる、喉=泥=産道=性器のなかからかすかに発する泥の言葉に自伝的記憶の物語とイメージの断片を映し見ながら、墓穴の闇のなかへ、かすれる息の音を書き留めながら消えて行った。

2. 第30回研究大会日程・大会会場・懇親会場

大会の会場は法政大学・市ヶ谷キャンパスの富士見ゲートG403教室となります。また大会終了後には懇親会が行われます。大会の会場については、プログラム裏面の地図をご参照下さい。

懇親会費はドリンク込みで7000円です。多くの方々のご参加をお待ちしております。**懇親会費は、当日受付でお支払いくださいますようお願い申し上げます。**

☆ 第 30回研究大会

日時：2018年6月9日（土）10:00-18:00

大会会場：法政大学　市ヶ谷キャンパス　富士見ゲートG 403教室

〒102-8160　東京都千代田区富士見2-17-1

☆ 懇親会

日時：2018年6月9日（土）18:30-20:30 （予定）

会場：アルカディア市ヶ谷（私学会館）

〒102－0073　千代田区九段北　4－2－25

電話　03－3261－9921（代表）

3. 協会設立３０周年特別講演会のお知らせ

協会設立30周年を記念して、*The Years of Bloom: James Joyce in Trieste 1904-1920* の著者であるJohn McCourt氏を特別講師としてお迎えし、特別講演会を10月に開催する予定です。詳細については協会のホームページに後日掲載いたします。

4. 会費の振込について

会費は、協会の口座へのお振込みをお願い致します。 振込用紙をご利用の場合は、郵便局や金融機関に備え付けの用紙をお使い下さい。恐れ入りますが、お振り込みの手数料は会員の皆様にご負担いただいております。ゆうちょ以外の銀行からの お振込みの場合、下記の振込先となりますのでご注意下さい。懇親会費（飲み物付き　7000円）は、事務処理軽減のため、大会当日に受付でお支払いくださいますようお願い申し上げます。

一般会員・・・5000円　　学生会員・・・3500 円

1. ゆうちょ銀行からのお振込みの場合

名義　日本ジェイムズ・ジョイス協会
口座番号（記号）10430
番号1854541

2. ゆうちょ以外の銀行からのお振込みの場合

名義　日本ジェイムズ・ジョイス協会
銀行名：ゆうちょ銀行
金融機関コード：9900　店番号：048
預金種目：普通
店名：〇四八店（ゼロヨンハチ店）
口座番号：0185454

日本ジェイムズ・ジョイス協会　事務局

日本ジェイムズ・ジョイス協会 事務局
（キャンパス移転のため住所が変わりましたのでご注意ください）

〒422－8581　静岡市駿河区弥生町6–1
常葉大学　外国語学部英米語学科　戸田勉研究室内
Mail ：joyceanjapan(at)gmail.com　［(at)を＠に］